

エレミヤ書45章5節 「大きくなって良い」

1A バラクにとって「大きな事」

1B 書記の地位

2B 「悲しみ」からの距離

2A しもへの報い

1B 肉なる者への災い

2B 命という分捕り物

本文

エレミヤ書 45 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、43 章まで来ました。午後礼拝で 44 章から 46 章まで学びますが、今朝は 45 章 5 節に注目します。「**あなたは、自分のために大きなことを求めるのか。求めるな。見よ。わたしがすべての肉なる者に、わざわいを下すからだ。…主の御告げ。…しかし、わたしは、あなたの行くどんな所でも、あなたのいのちを分捕り物としてあなたに与える。**」

これは、預言者エレミヤの預言を書き記していった、書記バルクに対する神の励ましの言葉です。彼は、エレミヤの悲しみの預言を語っているのを忠実に書き記していきました。エレミヤに同伴している中で、彼の預言の務めを助けている中で、自分自身もエレミヤと同じような悲しみと苦しみを通していきました。時にエレミヤと同じように物理的な危害を受けそうになったことは、数知れません。そしてバルクは、疲れ果ててしまいました。彼は、普通の仕事に戻りたい。自分であれば、預言者に同伴するような働きではなく、役人としての仕事に戻りたいという誘惑もあったのでしょうか。それで主は彼に、「**大きなことを求めるのか。求めるな。**」と言われました。

1A バラクにとって「大きな事」

昔、私の知り合いで韓国人の方がいました。彼は大学教授にもなれる人だったのですが、職を失っていました。奥様が働き、当時、本当に経済的に大変な状況だなど、分かりました。その時に、話が転がり込んで来たようです。時は、韓国では盧武鉉氏が大統領になった時です。かなり前ですが、一般の弁護士で、当時はとてもクリーンなイメージで、それで韓国民に選ばれた人でした。その政権が始まる時に、政府の中で働かないかという誘いを知人から受けました。そこで彼は自分の教会の牧師に相談したそうです。牧師はこう助言しました。「利用されるだけになる。捨てられる。」その助言を受けたようです。ですから経済的困窮はその後、しばらく続きました。しかし盧武鉉政権ですが、その後、彼自身に汚職が見つかりました。そして残念なことに、彼は最後に自殺してしまいました。では、その韓国人の兄弟は？という、その後、彼は大学での職が与えられ、それ以来、経済的にも安定した生活を送っています。

1B 書記の地位

バルクという人はそういう状況の中にいた人でした。彼は能力があり、地位もあるようです。彼の兄弟セラヤは、ゼデキヤが王の時に王と共にバビロンに行っています(51:59)。彼自身の名前「バルク」は「祝福」です。父「ネリヤ」は、「ヤハウエが私の灯」という意味です。主を恐れる父を持ち、それでいて王族に仕える家族の中にいました。そして時は、1節に書いています。「ネリヤの子バルクが、ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの第四年に、エレミヤの口述によってこれらのことばを書物に書いたときに、預言者エレミヤが彼に語ったことばは、こうである。」これは 36 章に書かれていた出来事です。

エレミヤが、ヨシヤが王の時からずっと預言してきたこと、22年間もの預言を、書き記していった時のことです。その時ユダの国、また周囲の国は大きな危機の中にありました。ユーフラテス川の上流地域にあるカルケミシュで、エジプトがバビロンと戦い、ことごとく負けてしまったことです。このために、この地域はずっと大国エジプトが勢力を持っていましたが、一気にバビロンが支配するようになる始まりでありました。しかし主はこれを、ユダの国、エルサレムの都が主なる神に立ち返るための警告として、お許しになっていました。彼らが主に背を向けて歩んでいるけれども、悔い改めれば主が憐れんでくださるという預言を神はエレミヤに与えておられました。

そして 36 章に、これらの預言を文書にすべくバルクに対して神は命じられました。エレミヤにとっても彼の存在はとても大きいものでした。エレミヤはしばしば、祭司や偽預言者によって迫害を受けていました。この時も身の自由がきかなかったのでしょうか。彼はバルクに、この預言を一般の人々に読み聞かせるように頼みました。それで、書記の部屋から、通りかかる人々に聞こえるように読んでいったのです(10 節)。それを聞いていたミカヤが、首長たちの集まる部屋に行き行って聞いたことを伝え、それでバルクが彼らの元に連れて来られました。そしてバルクに読み聞かせてもらいました。首長たちは恐れを抱き、「私たちは、これらのことをみな、必ず王に告げなければなりません。(16 節)」と言います。悔い改めなければ、エルサレムがバビロンによって滅ぼされるという使信、メッセージだったからです。そして、「あなたも、エレミヤも身を隠しなさい。だれにも、あなたがたがどこにいるか知られないように。(19 節)」と指示します。身の危険を感じる内容だったのです。案の定、エホヤキムがそれを聞いたら、数行毎にその巻き物を小刀で切り裂いては、暖炉の火に投げ入れ、全て燃やしてしまったのです。そしてバルクとエレミヤを捕えようとします。しかし主が彼らを隠されます。そして主はエレミヤに再び語られ、もう一度、巻き物をバルクに与えて、これらを再び全て書き記し、さらに多くの言葉も書き加えさせました(32 節)。

その心理的圧迫は、とんでもないものだったでしょう。まず、エレミヤが語るのではなく、自分が語らなければいけません。それで人々はエレミヤに対してのみならず、バルクに対しても危害を加えようとしていたでしょう。事実、エジプトに逃れようとしたユダヤ人たちは、エレミヤの預言が気に喰わないと、「ネリヤの子バルクが、あなたをそそのかし」のだと言いました(43:3)。そして書き記していく内容は非常に重く、緊迫したものであり、民が滅びるというあまりにも悲しい内容でありま

した。彼の心はすり減っていました。そして、もうこんな務めはやりたくないと思っていました。落胆して、自分はもうだめだと思いました。45章3節には、「ああ、哀れなこの私。主は私の痛みに悲しみを加えられた。私は嘆きで疲れ果て、いこいもない。」と語っています。

主にお仕えする時に、主が私たちと共におられます。それゆえ、主が受けられる反対を、私たちも受けなければいけなくなります。これはイエス様を自分の主として受け入れ、この方に仕えて生きていこうとするところから始まります。これまで受けていなかったような試練や困難に直面するのです。自分が何かおかしいことをしているのか？と驚いてしまうのですが、実はそうではありません。主ご自身が自分の生活に働いておられるがゆえに、それに刺激を受けて反発するような人々の心を目の当たりにするからです。主に命じられたこと、主に語られたことを行なおうと、信仰をもって応じることはとても祝福があります。けれども、人間的には肉との戦い、世との確執、そして霊の戦いがさらに激しくなります。パウロは、テモテに対して、「2テモテ 3:12 確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」と言いました。

ですからバルクは、思ったことでしょう。「わざわざ、主に関する事がらで自分の心をすり減らす必要はない。普通にエルサレムで王宮に仕えていれば、大きな問題はないだろう。」これが、主の語られていた「**大きなこと**」であると思われます。主に心を動かされて、それで行なっていたのに、それでいろいろな困難や混乱、試練を受けたので、一歩引いて、あまり主に関する事から関わらなければ、生活が安定するだろうと思うのです。

2B 「悲しみ」からの距離

もう一つ、主が語られる「**大きなこと**」とは、「悲しみからの逃避」でありましょう。主の語られることは、ユダの民が主から目を話し、神に背いている。そして主が彼らを剣と飢饉、疫病の災いを送るというものでした。人の罪について、あまりにも生々しい姿を聞き続けなければいけないので、エレミヤと同じようにユダの民を愛しているバルクは、これ以上、こんな悲しいことを聞いていきたくないという思いをしていることでしょう。

聖書を読むときに、時々、投げ出したくなるようなことがあります。それは、自分について、また人全般について、これまでかと言うほどにその惨めな姿を示してくるからです。フェイスブックを見ると、「いいね！」のボタンの他に、「悲しい」マークを選択できるようになっていますが、悲しいマークを押すのは、本当に辛い、悲しいです。つい一昨日も、フェイスブックで知り合いになった兄弟ですが、少年の時に同級生から、男からだけでなく女からも性的嫌がらせを受けた話を、生々しく書いていました。悲しいマークを付けました。私たちの試練が何かと言えば、「愛が冷える」ことでしょう。イエス様は終わりの日には、「不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。(マタイ 24:12)」と言われます。つまりきが増えるので、私たちの魂が疲れます。互いに愛し合う、人に関わろうとすることを億劫に思います。

そして私たちは、悲しみから目を背けたくなくなります。もちろん私たちはピリピ書で、良いこと、称賛に値すること、こういったことに心を留めて、主にあって喜びなさいとパウロから勧められています。しかし、それは罪を軽視する形で行ってはなりません。パウロは同じピリピ書で、腹を自分の神としている、自分の欲望のままに生きている人々について嘆き悲しんでいる部分があります。悲しいことは避けられません。それは人が罪を犯すからです。そのことに目を背けると、終わりの日にある人々ようになってしまいます。「2テモテ 4:3-4 というのは、人々が健全な教えに耳を貸さず、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」

しかし悲しむことから逃げてはいけません。イエス様は、山上の説教で「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。(マタイ 5:4)」と言われました。神の国に生きる者は、悲しみを経ます。そしてその悲しみを経てのちの永遠の慰めを得ます。イザヤは、イエス様を預言して「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。(53:3)」と言いました。

2A しもべの報い

それで、バルクは預言者を助ける働きから退きたいと少し思っていました。それで主は励まされました。

1B 肉なる者への災い

「求めるな。見よ。わたしがすべての肉なる者に、わざわいを下すからだ。」と言われます。先ほどの韓国人の兄弟のように、私たちが安定を保障するかのように見える話は、主によるものでなければ、たちまち過ぎ去ってしまうものです。主は、これからのエルサレムを滅ぼされると言われているのです。イエス様に従っていくようになって、何か職場でうまくいかなかったと思っても、その会社そのものが倒産する、大きなことを願うなど、言われているようなものです。。いや、もっと規模が大きいですね、エルサレムの町、ユダの国そのものがバビロンによって滅ぼされると主は言われているのです。王室での役職どころの話ではないのです。

聖書には、私たちがほっとできるもの、快適を約束してくれるものに拠り頼んではいけない、頼むべき方は主イエスのみであることを教えています。この世のものは過ぎ去ることを教えています。ルカ 12 章には、よく知られている金持ちの話がありますね。豊作でこれから何年分も遊んで暮せるほどの収益を得ましたが、主が、「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。(12:20)」と彼に語られました。イエス様はまた、「マタイ 16:26 人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう。そのいのちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」と言われました。

そして終わりの日に近づくにつれ、そのようなことがもっと頻繁に起こります。「1テサロニケ 5:2-3 主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。」

2B 命という分捕り物

ですから私たちはますます、主ご自身の近くにいないといけません。そして、主のところには、必ずどんなことがあっても、救いが備えられているのです。主は、「しかし、わたしは、あなたの行くどんな所でも、あなたのいのちを分捕り物としてあなたに与える。」と言われます。いろいろなことが起こります。けれども必ず、自分自身が救われていることに気づきます。主が真実な方であることに気づきます。どうやって助かったのかと、後でマスコミの人に尋ねられるとします。その時、「ええ・・・分かりません。でもイエス様が救ってくださいました、ということだけははっきり言えます。」と答えることができます。パウロは宣教旅行の中で、多くの死の危険がありました。けれども、そこから救ってくださった神の真実を証言しています。「2コリント 1:10 ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。」

私たちがますます、自分にとって最も大切なものが何かを知っておく必要があるでしょう。イエス様の弟子七十人が宣教の働きから帰ってきて、そこでイエス様の名で悪霊を追い出したことを喜んでいました。これはすばらしい喜びであり、イエス様も喜びました。私たちも、人々が暗闇の力から解放されたのを目撃したらとても喜ばしい知らせでしょう。けれどもイエス様が言われました。「だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。(ルカ 10:20)」そう、魂の救いを得ていること、天に名が記されている、主のものとしてされており、覚えられていること自体を喜びなさいと言われます。私たちの生活の中で、いろいろなことが起こります。その時に、「自分が神によって救われているという人生を全うするのだ。」という視点から日々を歩みたいですね。そうすれば、大きなことを望みません。いや、最も大きなことは救われていることを喜ぶことだということを思い起こします。

私たちは、自分のしたことに対して、その報いがあるかないか、分かり易く言えば「やりがいがあるかどうか」を尺度にして生きています。けれども、その生活は失望や落胆、また有頂天になるという繰り返しを経験するので、疲れてしまいます。自分が主に対して忠実であること、ただ言われていることを行なっていること。成果ではなく、主との関わりと交わりを喜んでいること、これを念頭に置いておけば、目先の報いに左右されなくなります。イエス様はそのような姿勢を、僕の中に見つけるようにいわれます。「ルカ 17:9-10 しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。」

私たちにとっての最大の報いは、永遠の命そのものです。主に従うために、私たちは全てを捨ててきました、とペテロが言ったことがあります。何か大きな報いをペテロたちは期待していたことでしょう。イエス様は、その純粋な思いを否定されませんでした。イスラエルの十二部族をそれぞれの使徒が神の国で治めることを約束されました。そしてこう言われました。「マタイ 19:29 また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」この世において、主は自分が捨てた分を埋める有り余る報いを与えてくださいます。そしてその行き着くところが、かの世における永遠の命です。

ですので、主に仕えることを強くお勧めします。仕えると言っても、それは主を信じて、生きていく。具体的に主に語られたところに応答することに他なりません。その道はいのちの道です。救いの道です。どんなことがあっても、どこに行くにしても主が共におられる、その臨在を楽しむことのできる道です。そして、その後にある永遠の命への確信を持てる、安らかな道です。